

# 日本語における Theme 構造：

## Transclausal Theme と Local-clausal Theme の提案

佐々木 真

### 要 旨

日本語の clause では一方で「ハ」によって具現化される Theme と他の格助詞などで具現化される Theme がある。前者は後続の clause にも Theme として作用する力を持つが、後者はその clause だけに作用する。本論では前者を Transclausal Theme (clause 超えの Theme) と定義し、後者を Local-clause Theme (clause の Theme) と定義してそれぞれが相互に作用し情報構造の層を形成していることを論じる。

### 1. はじめに

Systemic functional linguistics<sup>1)</sup> において Theme<sup>2)</sup> とは clause<sup>3)</sup> の出発点と定義され (Halliday 1994), その機能はテキストを形成する上で重要な役割をはたす (Bloor & Bloor 1995, Eggins 1994)。これは単に物理的に最初に現れるものという意味ではなく、その clause が何について述べているものか、何を意味しようとしているか解釈する際に起点となるものという意味で出発点と定義される。ただしその具現化の様式は各言語により異なり、例えば英語では語順がその役割をになう。すなわち英語では Theme が clause の最初の位置におかれ、反対に最初の位置におかれたものはその clause についての Theme を示していると考えら

れている<sup>4)</sup>。Halliday (1994) は Theme は必ずしも clause の冒頭に來るべきものではなく、他の統語的操作によっても具現化されると述べ、その例として日本語の「ハ」をとりあげ、これが Theme を示すマーカーとなっているとしている。この「ハ」という助詞をつけられたものが、すなわち Theme となる考え方は Halliday だけではなく、従来の国語学においても同様である (三上 1960, 堀口 1995, 角田 1991, 玉村 1992)。しかし、実際のテキストを分析すると日本語の clause では「ハ」をとらないものが多く存在する。このような場合には果たしてその clause の出発点は存在しないのだろうか。

佐々木 (1996) はすべての clause にはそれぞれの出発点、すなわち Theme があると仮定し、「ハ」によって具現化される Theme を Theme と名付け、「ハ」のついた要素がない clause ではそれ以外の格助詞がついた要素を Theme ととり、そのようなものを Topic と名付けた。また単に「昨日東京に行った」といえばこれは「私」について述べたものであることがすぐにわかることから、日本語の clause では必ずしも Theme が clause の中に表出せず内包化されていると仮定し、そのようなものについては Embedded Theme と名付けた。さらに「ハ」により Theme 化されたものはピリオドを超えて影響を及ぼす (三上 1960) ということから、「ハ」が後続の clause に影響する場合には Crossing Theme となると仮定した。

しかし、これらの命名や仮定には様々な問題点が存在する。たとえば Embedded Theme は叙述では「私」であり、疑問では「あなた」としているが、まったく同じ clause でもテキストの中でその埋め込まれた Theme は変化してしまう。たとえば「昨日東京に行った」ではそのままでは「私」が Embedded Theme だが、前に「今日は太郎の姿がみえないね」という clause があれば同じ「昨日東京に行った」の Theme は「太郎」になってしまう。したがって、clause の Theme はそれ自体に埋め込まれたものというよりはテキスト内の情報の流れとコンテキストの両者により決定されるものとする方が望ましい。また Topic という名称は言語機能そのものではなく、話題という言語外の事象をさして使用する機会が多いのであまり望ましいものではない。さらに Crossing

Theme については「ハ」以外のものでも実際は clause を超えて Theme になることがあるので単に「ハ」という助詞の有無だけでそれを区別することはできない。そこで本論ではナラティブテキストの分析から佐々木 (1996) の提案したいくつかの Theme について修正し, Theme がいかに具現されるかをその階層という観点から考察する。

## 2. Theme の具現

SFL において Theme は clause が何について述べているかの出発点とされている。従って各 clause にはそれぞれの出発点があり, それぞれの Theme があると仮定することができる。しかし国語学では「ハ」の有無が Theme の有無と同等に見られるために次の 2 つの例では例 1 に Theme があり例 2 に Theme がないとされる。

例 1 太郎は花子にキスした。

例 2 太郎が花子にキスした。

しかしこれら 2 つの clause における差違は「太郎は」の方は旧情報を示し, 「太郎が」の方は新情報を示すという情報構造の違いであり (久野 1973, 寺村 1991), 出発点としての Theme の有無とは関係がないと考えられる。そこで佐々木 (1996) は係助詞「ハ」があればそれがついた要素を, そうでなければ初出の要素を Theme とするという仮定をして, clause すべてにそれぞれ出発点としての Theme をみとめている。従って, 次のような clause があればそれぞれの Theme は「昨日は」と「太郎が」になる。

例 3 昨日は太郎が東京に行った。

例 4 太郎が東京に買い物に行った。

通常係助詞「ハ」で示された要素は文頭に来るためにどちらも初出の要素をそのまま Theme と解釈することができる。ところがここで 1 つ問

題が生じる。それは「ハ」のついた要素の語順の問題である。例えば次のような2つの clause を考えてみよう。

例5 毎週日曜日に花子は教会へ行く。

例6 花子は毎週日曜日に教会へ行く。

もし語順に関係なく助詞「ハ」により提示されたものを Theme とするならば例5も例6も同じ Theme となる。しかし堀口(1995)は前者のような語順の clause に対してはある特定の出来事や事象を述べる事象叙述文、後者のような語順のものは特徴、属性などを述べる属性叙述文と分類している。堀口は例5のように時空間的副詞句が「ハ」で示された要素よりも前におかれると題目(Theme)・解説<sup>9)</sup>構造の外におかれ、その構造の前提となり、例6ではその題目(Theme)・解説構造の中に特定の時間的要素が組み込まれていて特定の時間における Theme の行動という意味が加わると述べている。すなわちこれを図に示せば次の通りになるであろう。

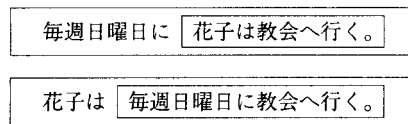


図1：語順による Theme の係りかた

堀口の主張をそのまま捉えれば、例5における「毎週日曜日に」は「花子は教会へ行く」という部分の出発点となっていると考えられ、また例6では「花子は」が「毎週日曜日に教会へ行く」という部分の出発点と考えることができる。

また塚田(1996)は日本語の基本語順という考え方から「ハ」のついた要素は時空間を示す副詞句に先行するのが基本的なものすなわち無標なものであり、その他の「ガ」「ニ」「ヲ」などの格助詞により示された要素は時空間を示す副詞句の後に続くのが無標なものであるとしている。そしてこれらの順番を変化させた場合には有標なものとなり、何かしらの

文体的な意味を生ずるとしている。

そこで堀口と塚田の考え方を検証すべく次のようなアンケートを行った。

まず堀口の例文を使用して次の ABCD 4 種類のテキストを用意し、それらを A・B, C・D のペアとして、本学英語学科 1 年生 (124 名) に対し

表 1：学生へのアンケート結果

項目	人数	割合
A	11	8.87%
B	113	91.13%
C	33	26.61%
D	91	73.39%

てそれぞれのペアのうち自分ならどれを使用するかを尋ねた。

- A. 毎週日曜日に花子は教会へ行く。父は家でテレビを見る。母はデパートへ買い物に行く。
- B. 花子は毎週日曜日に教会へ行く。父は家でテレビを見る。母はデパートへ買い物に行く。
- C. 毎週日曜日に花子は教会へ行く。彼女は敬けんなクリスチャンである。
- D. 花子は毎週日曜日に教会へ行く。彼女は敬けんなクリスチャンである。

調査前に立てた予想では堀口の考え方に則せば A と D が多く選択され、塚田の基本語順の通りなら B と D が多く選択されると考えた。そしてアンケートの結果ではこの塚田の考え方が立証され、表 1 の通り大部分の学生は基本語順にそった選択をした。

また次の例は筆者のもとに届いた年賀状の一部である。

例 7 早いもので今年篤は小学校、真理子は幼稚園に入ります。

この例では基本語順をくずし、モダリティと時間を示す副詞句が「篤は」「真理子は」に先行している。これはどういうことなのであろうか。おそらくは「篤は小学校に入る」という clause と「真理子は幼稚園に入る」という clause の両方にかかるように先行させたという経済的な動機によるものかもしれないし、あるいはこの時間的要素をモダリティとともに強調

させるべく、先行させたのかもしれない。いずれにせよ実際のこの clause ではこの塚田の言う基本語順をくずす何かの動機付けがはたらいていることは確かである。

このように堀口と塚田の考察、そして学生へのアンケートと例7から、実は日本語の語順はそれほど自由ではなく、一定の順序があり、もしそれを変化させれば意味的な違いを引き起こすことになると言えるのではないだろうか。それならば、「ハ」のついた要素についてはその順序に関係なく Theme と同定することは適切なであろうか。本論では従って、日本語の Theme は語順によって左右され、その表示は係助詞「ハ」やその他の格助詞によって示されると仮定し、clause の最初に現れる要素を Theme と考えることとする。

### 3. 分析と考察

それでは実際のテキストでは Theme はどのように具現化されるのであろうか。綾野・佐々木 (1997) はナラティブのテキストを分析し、その clause ごとに Theme を同定し、日本語の Theme がどのように具現化され、それがテキスト構成に対して、どのように影響を及ぼしているか分析している。この分析では各 clause の最初の要素を Theme として同定し、さらにそれが clause の participant であるか、あるいは adjunct であるか分類している。Participant とは clause を作る直接の構成要素で主語、動詞句、目的語、補語などがこれにあたり、adjunct は clause を修飾する副詞句などがこれにあたる。

この分析によると抽出された Theme の約40%が adjunct であり、時間や空間が Theme 化されるというナラティブテキストの特徴がよく現れているとしている。また participant Theme の約60%が特定の登場人物・事物を示し、そのテキストが何に関してのものかが如実に現れていると述べている。従って、clause の最初の要素を日本語の Theme とする捉え方には一定の妥当性があると考えることができる。

ところが、この分析においてはピリオド越えの「ハ」(三上 1960) や

佐々木 (1996) のいう Crossing Theme, すなわち clause をまたがって Theme となっているものを考慮していない。たとえば次の分析箇所を見よう。

そいつは伊勢海老ではなく, ||[[ゾウリのようなかたちをしたセミ海老といわれるおそろしく元気のいい]] 海老だった。||生命力も強く, ||暗いところに置いておくと||水がなくなっても||一週間ぐらいは確実に生きている, ||(と) 秀さんに聞いたことがある<sup>6)</sup>。

この分析例では縦の二本線が clause 境界, 下線部がそれぞれの clause の主題となっているが, 実はこの一連の clause では先頭の「そいつは」が後続の clause の前提, あるいは大きな Theme となっている。いわば次のような構造になっていると考えられる。

そいつは伊勢海老ではなく, ||そいつは| [[ゾウリのようなかたちをしたセミ海老といわれるおそろしく元気のいい]] 海老だった。||そいつは| 生命力も強く, ||そいつは| 暗いところに置いておくと||そいつは| 水がなくなっても||そいつは| 一週間ぐらいは確実に生きている, ||(と) 秀さんに聞いたことがある。

図 2 : Theme の再現

上の図では {そいつは} が補われ, しかもそれは先頭の clause から再現されていることを示している。このような場合, この「そいつは」に相当するものは省略された Theme としてあつかわれる。たとえば Eggins (1994) は 'The poor lady starts a relationship, gets married decides to go home.' という一連の clause を次のように扱っている。

the poor lady	starts a relationship	* (ellipsis of <i>she</i> )	gets married	* (ellipsis of <i>she</i> )	decides to go home
Theme	Rheme		Rheme		Rheme

図 3 : Eggins (1994: 292) より

つまりこのような場合 Theme は省略されており、残りの clause はすべて Rheme によって構成されているとするのである。もしこれを先の分析例にあてはめるならば省略された「そいつは」に対してすべて Theme という地位を与え、のこりの clause は Rheme とするべきなのであろうか。すなわち本来あるべき要素が省略されているとみるべきなのであろうか。

Eggs の挙げた例文においては省略された要素である 'I' を再現してもなんら不自然なことはない。ところが日本語を同様に考えて、省略されていると考えられる部分を再現するとかえっておかしなことになってしまう。たとえば堀口(1995)は次の例8の談話が不自然なものとしている。

例8 私は日曜日に京都へ行きました。私は有名なお寺をたくさん見ましたが、私はその中で龍安寺の石の庭がいちばんおもしろかったです<sup>7)</sup>。

堀口はこの談話が文法的には正しいが不自然さが生じる原因として日本語の表現では、分かり切った自明の題目の部分は省略して言うのが普通で、ことに自明である題目部は省略するのが普通だとしている。したがって先の「そいつは」のようなものを単純に省略された Theme と考えるにはいささか問題があると考えられる。なぜなら省略というのは選択的なもので、行っても行わなくてもよい。つまり省略されたものを残したまま、省略しなくてもよい。ところが堀口が示しているように日本語では「私は」をすべて復元した clause はむしろ不自然なものになってしまう。また三上(1960)も「我々」という語をつけたままのものはある限定された人々というむしろ有標の意味をもたらすとしている。そうすると単に省略された Theme として片づけるのはどうだろうか。ここには省略すべきか否かという選択があり、そこで省略を選ぶ必要があるから省略をするのではないだろうか。

また省略と考えるなら、省略されたものを補うことができるが、ここでもまた一つ問題が生じる。それはどこに省略された要素を補うかということである。省略されたものはそのほとんどが係助詞「ハ」により再現



できるものであり、先に述べた基本語順に照らし合わせて考えれば、clause の先頭になる。そしてそのまま clause の先頭に再現すればそれは自動的に Theme としてとらえられる。綾野・佐々木 (1997) はその疑問に対して、実際に省略された Theme を補い、それを Theme とすればどのようなことになるか検証している。その結果、ナラティブテキストの特徴といえる時空間的な要素を前面に出すということが消えてしまうと述べている。またこの省略された Theme を補うことは先の語順という面から考えれば、この語順の操作によって文体的な意味や効果を加えているかもしれない側面を消してしまうことにもなりかねない。

またこの「私は」や「そいつは」のような要素にたいして省略ではなく、削除だとする考え方もある。ただし、削除と考えると、それを復元したときに文法的に不適格なものになると考えられないだろうか。日本語の clause では復元しても clause 自体統語的な部分では不適格なものになるとは限らないのである。

それではこのように係助詞「ハ」によって具現化されるものをどのように扱えばいいのだろうか。三上 (1960) がピリオド越えの「ハ」とよび佐々木 (1996) で Crossing Theme と仮定したものは確かに機能し、実際に後続の clause の意味的な枠組みを形成していることは否定できない。ただしこれを省略や削除といった、いわば再現することに一つの恣意性を生み出す操作と考えるとすればどのように把握すべきなのであろうか。

そこでこれについては一種の階層構造をなしていると考えればよいのではないだろうか。つまり係助詞「ハ」により具現化されているものは後続の clause に対して大きな意味解釈・産出の基点を提示し、さらに clause にはそれぞれの clause の意味解釈・産出の基点があると仮定するのである。これはいわば前者を大きな Theme、後者を小さな Theme と呼ぶこともできるかもしれない。例えば「昨日東京に行った」という clause の大きな Theme は発話者かあるいは先行している人称、そして小さな Theme は「昨日」という時間を示すと捉えることができる。またもしこの「昨日東京に行った」という clause に「私は」とい

う人称がつけられて「私は昨日東京に行った」となれば大きな Theme と小さな Theme が混在し「私は」が Theme として捉えられるだろうし、この clause にはいくつかの clause の意味的な枠組みをこれから提供するというテキスト内での機能も負う可能性がある。

そこでこのような大きな Theme に対しては clause を飛び越えると言うことから Transclausal Theme (TCT), そして小さな Theme に対してはその固有の clause の Theme になるということから Local-clausal Theme (LCT) という用語を当てはめることにする。TCT は三上の言うピリオド越えの「ハ」や佐々木のいう Crossing Theme と同じもので、「ハ」によって具現化され後続の clause の Theme のさらにメタ Theme として機能する。たとえば先に例に挙げた伊勢海老にまつわる箇所を TCT と LCT を使って示せば次の図 4 のようになる。この図では TCT として機能している「そいつは」が後続の 5 つの clause に対して大きな出発点として機能しているために大きな四角で囲われ、またそれぞれの後続の clause は小さな四角で囲われ、その中には LCT として機能している要素が記入されている。また矢印 (→) は TCT がそれぞれの clause に対して意味的な影響を及ぼしていることを示している。

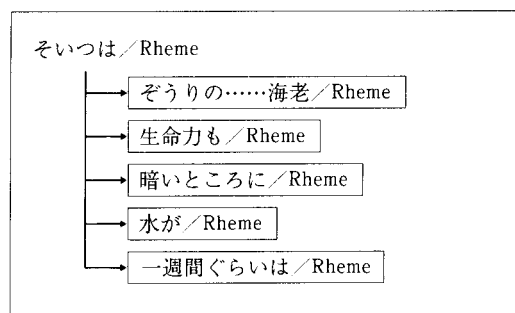


図 4 : TCT と LCT を使った Theme 関係

TCT と LCT の関係は厳密な意味での階層構造と言うよりはむしろ透明なシートが重なり合ったものと考えた方が適切かもしれない。これは一つの TCT が具現化されればそれはその clause 自体と後続の

clause の意味の基底になり，その上に LCT が重ねられる。このように考えればたとえ「昨日東京に行った」という clause は TCT が「私」であれば私についての出来事として解釈され，あるいはその他の人称が TCT として現れていれば全く同じ clause もその人称についての記述として解釈される。

TCT は必ずしも「ハ」によってのみ具現化されるとは限らない。例えばある動作を示す clause<sup>8)</sup> の場合にはその動作主が先行する clause で「ガ」によって具現化されていたとしても TCT の機能を果たすことがある。例えば次の例をみてみよう。

例 9 前と同じスチュワーデスがやってきて，||僕の隣りに腰を下ろし，||もう大丈夫かと訊ねた。||<sup>9)</sup>

この例の場合には「スチュワーデスが」という TCT が後続の 2 つの clause の Theme として機能している。ただし，このように「ハ」以外の格助詞が TCT として機能する場合には後続の clause は先行する clause とはいわゆる「～て」形によってつながれたものとう限定された環境だけではないかと思われるが，「ハ」が TCT として機能する場合とそれ以外の格助詞が TCT として機能する環境については今後のデータ分析によりさらに検証が求められる。

最後にまとめてとして TCT と LCT の関係を表すと次の図 5 のようになる。

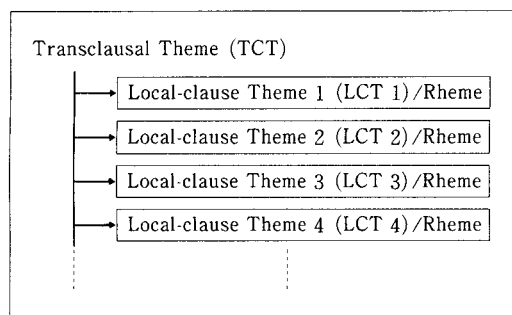


図 5 : TCT と LCT の関係 (©Makoto Sasaki)

TCT は次の TCT が具現化されるか、あるいはそれに匹敵するものがあらわれるまではその機能を持続する。もし Eggins (1994) や Thomson (1996) の考え方からすれば TCT はそのまま従来の Theme, そして LCT は Rhematic Theme とも考えられるかもしれない。あるいは Rheme 部に Theme を考慮すること自体に疑問があがるかもしれない。しかしながら、たとえどのようなラベルづけをしようと, clause には厳然としてどのように始めるか, 語順が英語に比べて比較的自由なはずの日本語でもどのように具現化するかはテキスト全体の構成の中である程度規制を受けるようである。それではそれらの規制は何かから発生するのだろうか。それは基本語順であり, さらにはテキスト内での情報をどのように構成するかという情報構造であろう。したがって, 単に「ハ」により具現化されたものを Theme としてその他のものを排除すれば日本語のテキスト形成において「ハ」を持たない clause の情報構造内の役割が明確にならない。そういう意味では TCT, LCT という 2 つの Theme 階層を設定することに意義があると考えられる。

#### 4. 結 論

本論では clause 中での Theme を考えてきたが, もちろんコンテキストやジャンルからわかる Theme も今後は範疇に入れて考えなければならない。またさらにその上位にはコンテキストによって示される Theme, いわば Contextual Theme があり, さらにはそのコンテキストには具現化されていなくても文化的に具現化されている Cultural Theme とも言うべきものがさらにあり, これらが層を成していると考えられる。これらの層は下から広く, 文化的なものコンテキストによるもの, TCT, LCT となっていて, 次の図のようになっている。

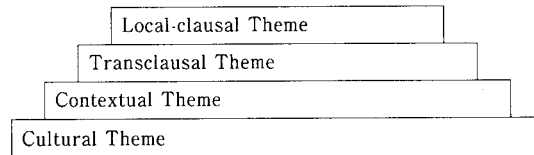


図6：Theme 階層

そしてテキストの中で具現化される時は Theme としては重なりの上にあるものから直接情報構造の構築に貢献する。また特に TCT に相当するものが現れない場合にはその下にある Contextual Theme や Cultural Theme がそのまま clause の解釈・産出に関わる。このように考えていけば日本語の Theme はこのような階層全体の相互作用によって具現化されると言えるのではないだろうか。またこれにより日本語には主語がないとか、日本語は省略が多い言語であるという議論をする際に一つの指標ともなろう。

日本文化では以心伝心というように言語化しなくてもわかると言うことがあるが、これは文化的なコンテキストとして共有する前提あるいは大きな文化的な Theme が規定されているためにあえて言語化する必要がないということではないだろうか。島国の中で閉ざされ、したがって共有するものの密度が高い日本文化ではいったい何について述べたことからは、文化的なものからその場のコンテキスト、そしていくつかの clause をまたぐもの、そしてその clause の中のものといくつかの Theme の相互作用によって示され、その非言語的な Theme の果たす役割は大きい。これは民族間の交流や政争が頻繁であった西欧文化の中で培われた英語という言語の中のそれとはかなり異なったシステムなのかもしれない。今後はこれらの Theme の階層という仮定がどこまで有効か、そしてこれらがどのような相互作用して、意味のダイナミズムを生みだしているのかを考察しなければならない。

## 参考文献

- 綾野誠紀・佐々木真 (1997) (in press) 「日本語のナラティブにおける Theme に関する試論」, 『機能言語学会ワーキングペーパー』 vol. 1
- Egins, S. (1994) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*, London: Pinter
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd ed. London: Arnold
- 堀口和吉 (1995) 『「～は～」のはなし』 東京: ひつじ書房
- 三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』 東京: くろしお出版
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 東京: 大修館書店
- Sasaki, M. (1996) 'An Analysis of Realization of Theme in Japanese.' *The Faculty Journal of Aichi Gakuin Junior College 4*
- 玉村文朗 (編) (1992) 『日本語を学ぶ人のために』 京都: 世界思想社
- 塚田浩恭 (1996) 「日本語の Theme 構造: 体系機能文法の観点から」 関西外国語大学大学院研究論集 FONS LINGUAE Vol. 6
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 東京: くろしお出版

## 註

- 1) 日本語では「体系機能言語学」「機能言語学」「選択体系機能言語学」のいくつかの訳があり、まだ定訳がない。そこで本論では英語の Systemic functional linguistics (SFL) の語を使用する。
- 2) Theme に対しては「主題」あるいは「題目」の日本語があるが SFL 理論の中で言う Theme がはたして主題や題目にあたるかはまだ疑問の余地があるので、本論ではあえてこれらの日本語を使用せず Theme とその説明部あるいは解説部に当たる Rheme の語を使用する。
- 3) SFL では従来の文法理論で group として扱ってきたものも clause として扱うために「節」という訳語は本論ではあえて使用せず clause という語を用いる。
- 4) ただし、SFL では Textual Theme-Interpersonal Theme-Topical Theme という Theme の複合構造をみとめているので、最初に現れるものといっても実際にテキスト形成において大きな比重を占めるのは Topical Theme である。
- 5) 三上 (1960) 流の用語では「題目・解説」を使用するが、これは Theme-Rheme のことである。
- 6) 綾野・佐々木 (1997) より引用。

- 7) 堀口 (1995 : 9) より引用。
- 8) SFL でいう material process のこと。
- 9) 第 4 回 Theme 研究会 (於 : 三重大学) における綾野・佐々木 (1996) の  
分析報告より引用。